

Karuṇāpūṇḍarīka と『大阿弥陀經』の成立順位考 ——『大阿弥陀經』の本願文の菩薩思想の観点から——

肖 越

1. 問題の所在 本論では、『大阿弥陀經』（以下『大阿』）の本願文に見られる菩薩思想を巡って、*Karuṇāpūṇḍarīka*（以下〈悲華經〉）と『大阿』の成立関係を中心に検討する。両經の成立順位に関しては、従来から〈悲華經〉の本願文は、〈無量寿經〉の四十八願の影響を受けたものであるという考え方が、ほぼ学界の定説（以下「伝統説」）となっている。しかし、最近石上氏は以上の伝統説には問題点があることを指摘した（石上 2012）。また筆者の研究（肖 2011, 2012ab）により、多くの証拠から『大阿』には、漢訳者により改訂、或いは撰述された内容が多くみられることが分かった。従って、改めてこの問題を検討すべきである。

2. 先行研究について 〈悲華經〉と〈無量寿經〉誓願文との関わりは、石上氏が、最近、〈悲華經〉に関する学位論文（石上 2012）をまとめた。氏の論文は、〈悲華經〉の誓願文のいくつかのものは「後期無量寿經」の四十八願系統の梵本、藏訳、魏訳などには一致せず、〈無量寿經〉の最も原初的な形を反映しているとされる『大阿』に一致する実例が何例か（第 2, 3, 20 の三願などの内容）見出されることに注目した。そして、〈悲華經〉の無諍念王の本願が「後期無量寿經」の願文をさらに発展させた形態とのみ見ることにいささか躊躇を覚えた旨を示した。この問題の解決策として、氏は「初期無量寿經」から「後期無量寿經」に発展する過程のどこかに、「中期無量寿經」という現存しない無量寿經を措定し、その「中期無量寿經」の阿弥陀仏誓願文の内容を発展、改変させて〈悲華經〉の誓願文が形作られたのではないか。その「中期無量寿經」とは、誓願文の願数においては、「後期無量寿經」にほぼ近づきつつあるものの、「初期無量寿經」の要素をいくつかの点において色濃く残している段階のものであろう¹⁾ という仮説を示した（石上 2012）。

以上、伝統説と石上説とも、〈無量寿經〉の誓願文は、〈悲華經〉の誓願文より先に存在したものであるという観点が共通点である。また、「〈無量寿經〉誓願文は、『大阿』の二十四願から『平等覚經』（以下、『平等』）の二十四願へ、そして後の四十八

願に発展してきたものである」という観点が、以上の結論の前提とされることも共通点である²⁾。石上説について、筆者は次の問題点を指摘したい。1) 伝統説が成立するには、①〈悲華經〉が基づくものとして先に想定された〈無量寿經〉は四十八願の願数を持つこと、②その中の幾つかの願事は、『大阿』の第2, 3, 20の誓願に一致すること、③〈悲華經〉の願文は、〈無量寿經〉のものを意図的に簡略化したものであることという三つの条件を同時に満たす必要がある。2) 伝統説には問題があることに注目する石上説が、今後の研究において、大いに参考になる。ただ以上の疑問を解明するために氏が提示する「中期無量寿經」という仮説は文献学的な裏付けがない。3) 石上仮説を成立させようとすれば、少なくとも次の三つの問題を解決しなければならない。ア) 想定された「中期無量寿經」の誓願文に『大阿』の誓願文の記が残っているのに、同じ「初期無量寿經」に属する『平等』の誓願文には、それらの特徴が存在しないという問題、イ) その「中期無量寿經」の誓願文に残された『大阿』の特徴は、後の「後期無量寿經」の誓願文でなぜ消えてしまったのか、ウ) 誓願文の形態において、なぜ〈悲華經〉の願文は〈無量寿經〉より素朴な形態を持っているのかという問題である。

3. 『大阿』の特異性 『大阿』の成立をめぐる研究をする際に、次の諸点を看過してはいけない。1) 「五悪段」と『大阿』の成立に深い関連があること。〈無量寿經〉における「五悪段」は、三つの段階がある。『大阿』のみににおける「五悪段」は、本願文を含む經典前半と深い関わりがある（肖 2012a）。2) 本願文と成就文とは、二重対応の関係を持つ。ほかの諸本と異なって、『大阿』の本願文の一部は、後の長行にあたる成就文と対応するだけでなく、本願文の直前にある法蔵菩薩説話段129字の内容にも対応している。このような二重対応関係は、『大阿』のみに存在する。3) 本願文には重複する内容がある。完全な重複と用語の重複という二種がある。例えば、第6願の後半の「斷愛欲」の次の17字と次の第7願の内容とが重複している。また、「智慧（勇猛）」の表現は、第7, 18, 22, 23願に重複して使用される。4) 『大阿』における誓願文と成就文との対応関係は、『平等』になると見られなくなることは、注意すべきである。例えば、『大阿』の第2願は、よく成就文と一致するが、『平等』の誓願文ではこれらの内容が完全に消えてしまった。それらは、すべて客観的に存在し、『平等』の願文をはじめ、現存の梵本に対応する内容が存在しない。したがってそれらの特徴は、『大阿』の梵本の原初形態を反映するものではなく、漢訳者が意図的に改訂したことを表すものである、と筆者は考えている。

4. 誓願文における菩薩思想 『大阿』の誓願文では、第20、2両願とも「菩薩・阿羅漢無数」を説いている。これは、上文に示した誓願文の重複の一例である。一方、後の『平等』になると、『大阿』の「菩薩・阿羅漢無数」を「我国弟子無数」（第12願）に変えた。更に「後期無量寿経」の魏訳、唐訳、梵本、チベット訳のすべては、「声聞無数」となる。先学らは、『大阿』が最初期の浄土経典の様子を示すものであるという観点に立ってこの問題を検討したが、問題は解明されていないままである。例えば、宇治谷氏は、「本願思想の発展史上からいって、『大阿』以後の本願を説く浄土経典には、ひとり「声聞無数」の願のみをあげて、「菩薩無数」の願を欠如しているのは何故であろうか。然るにまた、「寿経」所説の本願改修とも見られる〈悲華経〉の本願文が、何故に「菩薩無数」の願をこと新しく掲げねばならなかったか」（pp.125-26）と指摘している。この問題を明らかにするため、まず、仮に先学らの伝統説が成立することと考えておく。そして、その伝統説の成立の必要条件を巡って究明する。もし、その必要条件が、文献的に証明、あるいは仮想できるなら、先学らの伝統説が正しいという可能性が存在する。逆に、その成立の必要条件の存在が仮想でさえ説明できないなら、先学らの伝統説に問題があることは間違いない。先学らの伝統説が成立するためには、㊦『大阿』の「菩薩・阿羅漢無数」の誓願文は、原典から忠実に翻訳されたものである。その場合、『大阿』の梵本には、「菩薩・阿羅漢無数」の誓願文があったことは間違いない。㊧だとすれば、これらの内容が『大阿』以後の諸本に消えてしまった理由について説明しなければならない。もし、〈悲華経〉の「菩薩無数」の誓願が、〈無量寿経〉の「声聞無数」の願から発展してきたものであれば、何故、〈無量寿経〉系統自身は、このように発展しなかったのか、という二つの問題を先に解明しなければならない。従って、『大阿』の第20願に説いている「菩薩・阿羅漢無数」の内容は、原初形態であったかどうかが問題の焦点となる。

『大阿』の第20願には、㊨第2願の後半に、「化生」の次に「菩薩・阿羅漢無数」の内容がある。㊩「坐禅一心」の用語は、第19願にも使用されているという二種の重複がある。このように内容が重複するのは、〈無量寿経〉諸本のなか『大阿』のみに存在する。

まず、内容においても、配列順においても、第2願前半の「国無女人」と後半の「化生」の二つの願事は、〈悲華経〉の誓願文とよく一致する。既に筆者の別稿（2014）で論じたが、『大阿』の第2願は、原初形態ではなく、漢訳者の手により付加、改訂されたものである。従って、第2願の「菩薩・阿羅漢無数」の内容

は、漢訳者が強調したい内容である。

次に、誓願文の直前の法蔵菩薩段の 129 字に、「菩薩・阿羅漢無数」の内容がある。この段落に使用される用語（智慧・勇猛・善惡・精進・求索・解脫・自然）は、のちの「五惡段」にも使用されていることから、この段落は、漢訳者によって撰述された内容であると分かる。

次に、第 20 願の「坐禪一心」の用語は、「坐禪」と「一心」という二つの語からなる複合語である。『大阿』において、「一心」（19 回）は「禪定」の意味を示す。例えば、「阿弥陀為菩薩時，常奉行是二十四願。分檀布施，不犯道禁，忍辱，精進，一心，智慧」（p.302b）の用例と，「若曹於是益作諸善，布恩施德，能不犯道禁忌，忍辱，精進，一心，智慧，……作善為德」（p.315c）の用例より，漢訳者の傾向が顕著に表れている。菩薩行を勧めるのは、『大阿』のもう一つの特徴と言えよう。従って，第 19，20 願の「坐禪一心」の用語は，漢訳者が意図的に付加した表現である。『大阿』の誓願文において，このような漢訳者が意図的に付加する例は多数ある。例えば，往生の条件を説く第 6，7 願の「齋戒」，「分檀布施」，「六波羅蜜經」，また，梵行を勧める第 11 願に「無有念婦人之意」などは，漢訳者の戒（清淨）を強調する傾向が顕著に表れている。

更に菩薩思想を強調するのは，必ずしも「菩薩」の語を通じて表しているとは限らず，『大阿』では多様な形態で表している。例えば，誓願文の直前の法蔵に菩薩行を勧める比喻（「譬如天下大海水，一人斗量之……」（p.301a））があり，また，後にも同じような用例（「諸天下大海水，一人斗量之尚可枯尽得其底泥，仏智不如是」（p.309a-b））が見られる。この二つの用例とも，漢訳者により作成されたものである。以上はただ一部のみであるが，『大阿』の誓願文の「菩薩」思想は，『大阿』の原本にあったものではなく，漢訳者の菩薩行を強調する傾向が明確に表れている。

5. 『大阿』と〈悲華經〉 漢訳時期が『大阿』より遅れているからといって，〈悲華經〉の誓願文のもともとの成立が，必ずしも『大阿』より遅れるとは限らない。まず，形態から見ても，〈悲華經〉の誓願文のほうが，素朴な形態を表しているとも見ても間違いはない。例えば，〈悲華經〉の誓願文の数さえ，学者によって異なっていることから，〈悲華經〉の誓願文は，かなり古い形態を保っている。一方，〈無量寿經〉諸本の誓願文の形態は，かなり整っている。『大阿』の各誓願に，「第一願」のような標識が付されている。〈悲華經〉の願文は〈無量寿經〉の願文を簡略化したものとは考えられない。これだけでも，顕著な修正の印と言え

(46)

Karuṇāpuṇḍarīka と『大阿弥陀経』の成立順位考（肖）

よう。次に、内容からみると、〈悲華経〉の誓願文に重なっている『大阿』の誓願（第2, 3, 20三願）は、原本から訳されたものであると証明、或いは想定することができない。特に、原本にあったものであれば、なぜ『平等』の誓願文では消えているのか説明できないため、従来議論を喚んでいたのである。

6. 結論 まず、『大阿』の第20願の「菩薩・阿羅漢無数」の内容は、初期大乘仏教の形態を示すものではなく、『大阿』の翻訳者が菩薩思想を強調するために、もともと「声聞無数」(śrāvaka)であったのを「菩薩・阿羅漢無数」に書き換えた。即ち、〈無量寿経〉系統の誓願文には、「菩薩無数」の内容が、もともとはなかったと言えよう。そして、〈悲華経〉と〈無量寿経〉の誓願について、石上氏の、従来の伝統説では両経の関係が説明できないところがあるという指摘に、筆者は賛成するが、その問題を解明するための「中期無量寿経」の氏の仮説には、筆者は反対する。特に、本論の第2節に示した『大阿』の諸特徴を合わせて検討すれば、多数の特異性が同時に『平等』の誓願文では消えてしまった理由について、合理的な説明が全くできない。その反面、『大阿』を漢訳した時に、漢訳者の手によりかなり変容した証拠が多くみられる。したがって『大阿』の漢訳者は、部分的に〈悲華経〉の誓願文を参考にし、意図的に『大阿』の誓願文を二十四にまとめたのである。それによれば、『大阿』を漢訳した時点で、〈悲華経〉のような誓願文が既に存在したことが分かる。本論の詳細は、別稿に譲りたい。

-
- 1) 石上和敬氏が、未出版の学位論文の閲覧を筆者にご許可下さったことに感謝したい。
 - 2) 例えば、石上氏の「〈無量寿経〉の最も原初的な形を反映しているとされる『大阿』」という表現にもその意味が明確に含まれている。

〈参考文献〉

- 1) 宇治谷祐顕『悲華経の研究』（文光堂書店、1969）。2) 石上和敬『〈悲華経〉の研究——釈迦五百誓願を中心として』（東京大学提出博士論文、2012）。3) 肖越「『大阿弥陀経』の成立の問題を巡って」（『佛教大学総合研究所紀要』18, 2011）；肖「『五悪段』の成立と「浄土」の語」（『真宗文化』21, 2012a）；肖「『大阿弥陀経』における特異な「法蔵菩薩説法段」」（『仏教学会紀要』16, 2012b）；XIAO, Yue, “Women in the Pure Land: *Karuṇāpuṇḍarīka* and the *Dà āmítuó jīng*.” *Journal of the Institute of Buddhist Culture* (Musashino University) 30, 2014.

〈キーワード〉 『大阿弥陀経』, 〈悲華経〉, 『平等覚経』, 菩薩・阿羅漢無数, 声聞無数
(佛教大学総合研究所特別研究員)